

【一般演題3】 第12席**『内経』中の薬物について**

大阪 稲垣 元

『内経』中に所出する薬物療法について、近代になって論じたのは矢数有道氏が1941年に著わした「内経の薬方について」である。この論文中で内経中の11方剤について『太素』や『類経』等々を参照しつつ詳細を述べているが、内経中には12方、もしくは13方剤が記されているという説がある。

『素問諺解』中には『内経』所載の薬方は諸篇の中に凡そ12剤有りとするが、これについてまとめた論文は無く、矢数氏は「十一剤のほかは何があるのかわからない」としている。一方、江戸時代の和方家、三宅意安は著書『靈素方剂集説』中で13方剤をあげている。また、中国の医家、呉儀洛の撰になる『成方切用』には12方剤が挙げられており、さまざまな説があるようである。今回の調査においてはこうした業績をもとに、『内経』中に見られる薬方を整理しつつ、臨床応用に役立てるべく一つ一つの薬方について、金元時代の本草書を参照し、簡略な考察を加えてみようと思う。